様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　3 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010 年度～2012 年度
課題番号：２２７２００７５

研究課題名（和文）伝統的技術の戦略的継承法―現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究

研究課題名（英文）An Ethno-Artistic Study of Handicraft Culture in Contemporary India, Focusing on Strategic Succession Techniques for Traditional Crafts

研究代表者　上羽　陽子（UEBA YOKO）
国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授
研究者番号：１０５１０４０６

研究成果の概要（和文）：本研究は、ものづくりの「作りの手個人の創意工夫」や「伝統的技術の戦略的継承法」に実践的にアプローチし、その製作と流通の歴史を掘り起こすことによって、「伝統的」とされてきた手工芸品の社会・文化的意義をめぐる従来の視点を大きく変えることを目的とした。成果としては、南アジアの染織技術の特質について、インド西部やネパールなどの事例から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：By adopting a practical approach to the "originality and ingenuity of individual handicrafters" and the "strategic succession techniques of traditional crafts", and by delving into the history of production and distribution thereof, this research is intended to significantly change the historical perspective with regard to the “traditional” social and cultural significance of handicrafts. Accordingly, this article utilizes case studies from Nepal and West India to offer a clear explanation of the characteristics of dyeing and weaving techniques in South Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560.000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：民族芸術学・手工芸文化・染織研究・インド・伝統的技術

１．研究開始当初の背景

現在、世界中で手工芸文化の近代化が急速に進んでいるなか、南アジアの手仕事に対しては依然「村落において古来より伝統的に継承され続けてきた手工芸文化」といったイメージが浸透している。しかし実は、国内外からの支援や信仰活動によって支えられてきたものが多くある。ところが「職人コミュニティの文化人類学的研究」や「手工芸品の流通」といった研究は蓄積があるものの、「作り手個人の創意工夫」や「伝統的技術の戦略的継承法」などを含めた制作技術に関する在来知識の研究は、軽視されることが多かった。

それに対し、報告者はこれまでインド西部において、牧畜民の手工芸文化について明らかにしてきた。牧畜生活において身近な素材を用いての手工芸制作、また NGO など外部

手動による手工芸商品製作などを調査し、彼らの手工芸を取り巻く世界は、ひと・モノ・情報がそれまでの閾値を越えるような速度と規模で流動化している様子を明らかにしてきた。報告者は、このようなインドでの研究経過の中で、人類の生活様式の中で手工芸文化の多角的な役割が正当に評価されていないことに気がつき、本研究の着想に至った。

２．研究の目的

本研究では、インドでの手工芸文化をめぐる伝統的形態と現代的展開に注目することで、過去 100 年における手工芸文化の変容について民族芸術学的に把握することを目的とする。なお、報告者がめざす民族芸術学的アプローチとは、作り手側の視点に立って、技術誌的・民族誌的に製作過程を把握し、調査対象者が造作を行う際に、どこに焦点をあて、何を良しとして製作を行い続けているのか、また、商人や消費者がどこに魅力を感じながら手工芸品を扱っているのかといった点に特に注目するものである。また、手工芸品の製作と流通の歴史を掘り起こすことによって、「伝統的」とされていた形体が実は近年になって定着したものであることを明らかにするなど、手工芸品の社会・文化的意義をめぐる従来の視点を大きく変えることを本研究は目的としている。

３．研究の方法

報告者はインドの手工芸に関する学術的な研究に携わってきたのみならず、自ら染織技術による造作を行い作品を発表してきた。この意味においては、理論だけでは把握できない、現地のものづくりの人間の思考や行動に実践的にアプローチする感性と経験を持ち合わせている。地球規模の変動の波にのまれる製作現場の苦楽に共感できるこのような「ハンズオン」な視点での研究手法が、本研究を極めて独創的なものとしている。そのため、本研究では、理論だけでは把握できない、現地のものづくりの人間の思考や行動に実践的にアプローチする方法を重視する。

本研究では、村落への住み込み調査と、作り手や職人へ聞き取りを幅広くおこなう。また、都会での手工芸消費の動向調査なども適宜おこなった。

４．研究成果

(1)　グジャラート州アーメダバード県における女神儀礼用染布の製作現場における「伝統」の継承

女神儀礼用染布の製作現場では、実際に制作に従事しながら、手工芸品の素材、道具、技術の観察をおこなった。そして作業過程における「ものづくりの勘所」、「作り手個人の創意工夫」の観察分析をおこなった。

その結果、手工芸品の「伝統」が、製作者や販売者の戦略によって選択されながら継承されている様子が明らかになった。

(2)　都市における「伝統的技術」の消費

アーメダバード県で製作された女神儀礼用染布は、デリーやムンバイといった大都市において、商品として消費されている。とりわけ、年に 1 度デリーで開催されるインド手工芸祭は、インド全体の染織品の現状をつかむのに最適な場所である。

都市部におけるインタビューおよび参与観察から、インド手芸祭の組織や運営、インド手工芸領域における染織品の役割や位置づけ、販売者や購入者の戦略などのインタビューや参与観察をおこなった結果、製作現場での製作技術と、都市部における「伝統的技術」へのイメージのずれなどの関しての基礎的資料を構築した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

上羽陽子、2013「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』、査読有、37(1)、pp.1-51

〔学会発表〕（計 19 件）

上羽陽子、「ラバーリーのからだ機について」国立民族学博物館共同研究会『手織機と織物の通文化的研究』（代表：吉本忍）、2013 年 3 月 28 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「一枚布をまとう世界―南アジアの女性たちのくらしと布」『第 83 回ふろしきトーク』、2013 年 2 月 23 日、法然院

上羽陽子、「世界の糸、大集合！」『すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見（技術・家庭）』、2013 年 1 月 20 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「インドの手工芸文化について」『群馬県立前橋高等学校（学外研修）』、2012 年 11 月 6 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「インドの刺繍」『大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科』、2012 年 9 月 21 日、大阪市教育会館

上羽陽子、「インド、ラバーリーの刺繍布と通過儀礼―牧畜社会にみる伝統的形態の継承を考える―」『第 72 回月例会―歴史・文化に親しむ会―』、2012 年 8 月 22 日、梅田エステート・ビル

渡辺和之・上羽陽子、「羊毛織物ラリを織り続ける人々―東ネパール・オカルドゥンガ郡ルムジャタール村の事例から」『日本地理学会２０１２年春季学術大会』、2012 年 3 月 28 日、首都大学東京

上羽陽子、「インドとネパール―家畜の毛利用」『シンポジウム・モンスーンアジアの家畜文化を考える』、2012 年 3 月 18 日、奥州市牛の博物館 7410

上羽陽子、「東ネパール、ルムジャタール村の敷物つくりについて―乾季と雨季との比較調査から―」『熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究会』第１１回研究会、2012 年 3 月 18 日、奥州市牛の博物館

渡辺和之・上羽陽子、「羊毛織物ラリを織り続ける人々」『熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究会』第１２回研究会、2012 年 3 月 18 日、奥州市牛の博物館

上羽陽子、「インドの染織―女神儀礼布の製作現場から」『東西美術交流研究センター第 5 回特別講演会』、2012 年 1 月 22 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「インド西部・アーメダバードにおける女神儀礼用染色布の現状―製作技術を中心として」機関研究マテリアリティの人類学『布と人間の人類学的研究』（代表：関本照夫）、2011 年 12 月 26 日、
国立民族学博物館

上羽陽子、「伝統をめぐる戦略的表現―インドの女神儀礼用染布を事例に」『シンポジウム　手工芸とデザイン―伝統的形態と現代的展開』、2011 年 7 月 16 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「伝統的技術の戦略的継承法―インド、グジャラート州の女神儀礼用染布を事例に」『現代インド地域研究国立民族学博物館拠点第1回合同研究会』、2011年7月10日、国立民族学博物館

上羽陽子、「織りフェルトの敷物つくり―かれらはなぜつくり続けるのか？」『国立民族学博物館　友の会講演会（大阪）』、2011 年 7 月 2 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「女性による家畜飼育と畜産物利用の予備調査結果報告―東ネパール、ルムジャタール村の敷物つくりを事例に」『第６回熱帯家畜利用研究会』（代表：池谷和信）、2011 年 3 月 23 日、「食と農」の博物館

上羽陽子、「ハギレから生まれたもの―インド西部の人びとの知恵と生活」『ちくちくちく展』関連講演会、2010 年 11 月 28 日、永源寺図書館視聴覚ホール

上羽陽子、「インド西部のラバーリー社会の衣装文化―Clothing Culture of the Rabari People in Western India」第 2 回国際会議『カルチャーウェアとディアスポラ・ミュージアム　ディアスポラにみる文化の融合―民族衣装、ファッション、カルチャーウェア―』、2010 年 8 月 27 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「インド西部バンニ―地域におけるラクダ飼育」『第５回熱帯家畜利用研究会』（代表：池谷和信）、2010 年 6 月 26 日、国立民族学博物館

上羽陽子、「市民パートナーとの連携によるものづくり系ワークショップの可能性について―民博ワークショップ『じゅうたんをつくろう！』を事例に」『大学博物館等協議会 2010 年度大会・第 5 回博物科学会』、2010 年 6 月 24 日、東北大学総合学術博物館

〔その他〕
ホームページ等
http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/organization/staff/ueba/index

○新聞掲載情報
「見出し」・新聞社・掲載日（朝刊/夕刊）

上羽陽子、2013「旅・いろいろ地球人　たちこめる（2）「香ばしい」帽子」『毎日新聞』3 月 14 日夕刊

上羽陽子、2012「旅・いろいろ地球人　ずらりと並べる（7）組み合わせは無限大」『毎日新聞』6 月 21 日夕刊

上羽陽子、2012「旅・いろいろ地球人　そういえばあのとき…（5）女の装い一部始終」『毎日新聞』5 月 12 日夕刊

○その他

上羽陽子、2013「衣装デザインと光」『月刊みんぱく（2012 年度 2 月）』p.4、国立民族学博物館

上羽陽子、2012「つくり手の『勘どころ』を記録する（私の研究と出会い）」人間文化研究機構（監修）『HUMAN』3、pp.142-146、平凡社

上羽陽子、2012「触ってみる！感じてみる！―織物再発見」『月刊みんぱく（2012 年度 8 月）』p.8-9、国立民族学博物館

上羽陽子、2012「World Watching from India インドの新年は憂鬱!?」『みんぱく e-news（127 号）』国立民族学博物館

上羽陽子、2011「織りフェルトの敷物つくり―かれらはなぜつくり続けるのか？」『国立民族学博物館友の会ニュース』No.201、p.4、財団法人千里文化財団

上羽陽子、2011「フィールドで考える　まずは心と身体を解きほぐす」『月刊みんぱく（2011 年度 4 月）』pp.22-23、国立民族学博物館

６．研究組織
(1)研究代表者
上羽　陽子（UEBA　YOKO）
国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授
研究者番号：１０５１０４０６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし